ナミマガシワの手紙

作：巳明 狐白

あらすじ：港町の祖母の家に引っ越してきた少年・凪は、浜辺で貝殻に書かれた手紙を見つける。窓辺の記憶と静かでささやかな願いは、時を超えて繋がっていく。

特記事項：日常の中に現れた、小さな謎を紐とく、優しいお話です。

本文：4868 文字

陽の光は柔らかく、風は穏やかな浜辺。凪は朝の海を歩くのが好きだった。誰もいない砂上を、波の音だけが満ちている。祖母の家に来てから、もう三ヶ月。静かで、時間がゆっくりと流れる田舎町だ。

朝食のあと、祖母が干物を並べる音を聞きながら、凪は毎日浜へ向かう。その日も海は穏やかだったが、砂の上で朝日にきらりと光るものがあった。近づくと、それは薄ピンク色のナミマガシワの貝殻だった。祖母が「幸せを呼ぶ貝」と呼んでいた、薄くて壊れやすい貝だ。

凪はしゃがみ、そっと手に取った。光に透かすと、貝殻の内側に小さな文字が黄色のインクで書かれていた。『こんにちは』。それだけが丁寧な筆跡で綴られている。誰かの忘れ物だろうか。凪は貝をポケットにしまい、家に戻った。

その夜、祖母にその貝のことを話すと、祖母はこう言った。「昔ね、願いを書いて貝に入れて、海に流す風習があったのよ」凪は昼間拾った貝を見つめると、文字がどこか遠い時代のものに思えた。

日課の散歩を続けると、数日後にまたナミマガシワを見つけた。『お元気でしょうか。わたしは、今日も窓から海を見ています。』先日のものより少し大きい貝の内側に、同じ筆跡・同じ黄色の文字で書かれている。普通の手紙の書き出しのようで、願いと言うには少し違和感がある。祖母は“昔”と言った。今もこの風習を続ける人がいるのだろうか、と凪は首をかしげる。

暇を持て余したある日、凪は祖母の家の古い倉庫を探検していた。古い漁具や雑多な道具の中に工具箱があり、なんとなく開けてみると、ころころと小さな物が箱から出てきた。小さめで黄色いラベルが貼られた容器。ラベルは擦れて判読できない。固いキャップを外すと、フェルトのペン先が現れた。油性の太いペン先だ。

凪は母屋に戻り、紙に滑らせてみたがインクは乾いていて何もうつらなかった。だがペン先の色は、貝殻の文字の色とよく似ていた。夕食後、そのペンを見せると祖母は懐かしそうに目を細めた。

「この油性ペンは昔のものでね、濡れても消えないから漁師たちの間で重宝されたの。……この黄色いペンは、おばあちゃんの友達、羽美ちゃんからもらったものだよ」

祖母は古いアルバムや日記を取り出した。白黒写真の中で、祖母の隣に座って微笑む少女が

写っている。その子が羽美らしい。祖母は言葉を切りながら、羽美のことをぽつぽつ話した。幼なじみで、薬をたくさん飲む必要がある、すぐに疲れてしまう子だった。ふたりで海を見ているだけで満足だったが、やがて病気が悪化して家からほとんど出られなくなった。十六になる年の夏、羽美は亡くなったという。
祖母の日記には、羽美ちゃん本人から、この黄色のペンをもらった時の記述が残っていた。

“羽美ちゃん”の話を聞いた数日後に、またいつもの浜辺でナミマガシワを見つけた。
貝殻を光に透かすと、黄色の文字がはっきりと読める。
『波がいつもより高くて、貝が多く寄せられました。
おばあちゃんがくれた青い箱を開けて、紙屑で花を作りました。
貝が笑っているように見えました。』
海がすぐ傍のこの町で、いつも窓から海を見ている少女の視線と、穏やかで少し詩的な文体が、手紙の主の人柄を伝えてくる。
祖母は、ペンを見せたあの日から、“羽美ちゃん”の思い出をぽつぽつと話すようになった。花や草を集めて遊んだこと、貝殻を拾ったこと、小さな思い出の端々に、淡く光る“羽美ちゃん”の生きた跡が確かにあった。

また数日が経った黄昏時に、四つ目のナミマガシワが流れ着いていた。
『今日は外に出られませんでしたが、窓辺で潮の匂いを測りました。
心は外へ行きたがるのに、からだは言うことを聞きません。
それでも、海がそこにあるだけで救われます。澄ちゃんに会えたら、貝を一緒に数えたい。』
……“澄ちゃん”。
凪は、やっと確信が持てた。
この、ナミマガシワの手紙の主は、やはり祖母の友達の“羽美ちゃん”なのだと。
“澄”は、凪の祖母の名前。
四つ目の貝を流すころには、もう目の前の浜辺すら難しいような調子だったのだろうか。
しかし、祖母が言うには、貝を流すのは願いのためだが、今回の「貝を一緒に数えたい」が、初めての具体的な願いだ。この“羽美ちゃん”の貝には、一番の願いでありそうな「病気の治癒」は一度も書かれていない。初めの貝を書いた時、彼女はどんな願いを込めて貝を流したのだろう。

海が午後の光を溶かす時間帯、凪はいつもの道を選ばず、波打ち際から少し離れた岩の間を抜けた。潮の匂いはいつもより濃く、空は低くて、遠くの漁船が点のように揺れていた。
手に持った布の中で、ナミマガシワがひとつ鳴った。光に透かすと、内側の文字が静かに浮かび上がる。三日前に見つけた四通目と似た筆致だが、そこに書かれているのは今までのよ

うな短い断片ではなかった。大ぶりな貝殻の湾曲に沿って、“羽美ちゃん”の言葉が踊っている。
『澄ちゃんへ
今日は波が低くて、海はおとなしくて。
わたしは窓に寄りかかりながら、あなたと数えた貝のことを思い出しました。
青い箱を開けると、縫い糸の匂いが混じって、あなたの笑い声がふいに戻ってきます。
からだはもう遠くへ出られなくても、言葉はまだ海に触れると信じて書きます。』
凪は貝殻を膝に乗せ、海を見た。祖母の顔が、小さな仕草が、思い出される。羽美のことを話す時、祖母の声が少し高くなること、夢見る少女のような笑顔を見せること。手紙の文字は羽美の指先で綴られたように、柔らかく、でも確かに存在していた。

凪は倉庫へ戻り、あの古い工具箱を開ける。あの時よく見なかった箱の底には、擦れて色褪せた写真と、小さな布切れ、一冊の手帳の切れ端だった。写真の中で二人の少女が海を背景にして笑っている。澄の横にいるのは、窓辺で本を抱えるような少女、髪をそっとまとめた羽美だ。写真の片隅に、淡く鉛筆で「昭和五十年」と書いてあるのを、凪は見つけた。
手帳の紙は薄く、端は水に触れたように波打っていた。そこに、小さな走り書きがある。医者の名前、薬のメモ、羽美が好きだった歌の一節。
凪の指が震えた。文字の筆致は貝殻に刻まれた文字とどこか重なっていた。そこにあるのは、病の詳細を示す冷たい断片ではなく、日々の粒子——窓の光、干物の匂い、叔母がくれた梅干しの甘さ——だった。

凪は、言葉をしまいこむことの重さを初めて知った。羽美の言葉を伝えれば祖母は喜ぶだろうか、あるいは痛みを再び開いてしまうだろうか。答えは簡単ではなかった。凪の胸の中で、羽美の文字がゆっくりと振幅を続ける。
ある午後、祖母は台所の窓辺で干物を返しながら、ふと手を止めた。凪はその瞬間を見計らって、倉庫で見つけたものと貝殻を取り出した。凪はその中から写真を差し出し、息を整えてから貝殻を置いた。
澄の目が写真から貝殻へと移る。瞳に宿るものは驚きでも怒りでもなく、どこか遠くの浜辺の光景だった。「あの子の匂いがするね」と澄は言った。声に濁りはなかったが、針先が一度止まる。凪はその一瞬でわかった。伝えることは、驚きでも発見でもなく、澄にとっては既に記憶の一部であるのかもしれない。
凪は、胸の中にあった言葉を一気に吐き出した。貝殻の文字を見つけたこと、光に透かして初めて読めたこと、羽美の手紙が少しずつ増えていること。話すほどに、祖母の表情は柔らかくなる。時折、遠い日の風がその声に混ざる。祖母は、話を聞きながら目を伏せ、時折手の動きを止める。ときどき、口元に薄い笑いがちらりと戻る。
「羽美ちゃんはね」と澄は切り出した。「言葉を残すことが好きな子だった。きっと、誰か

に届くと信じていたのね」
澄の言葉は、思い出の周縁に灯りをともすようだった。手紙と日記の断片が照らし出すのは、病そのものではなく、それを抱えて生きる羽美の日常だった。病は輪郭を与えるが、輪郭の中で息づくものは、その人の色や匂い、笑いだった。
「あの子は、『言葉を、海に託す』って言って、いつも微笑んでいた」
凪は涙が一粒、頬を伝うのを感じた。伝えることは、澄に新しい痛みを与えるのではなく、澄がずっと抱えてきた記憶を凪と共有することだった。二人は言葉を交わさずに、しばらくその場で潮騒の時間を共有した。

夜、澄は古い文箱を引き出した。中には羽美が使っていたらしい小さな手鏡と、ひとつの白いナミマガシワが入っていた。貝殻の内側は少し磨耗していたが、光にかざすと微かに文字の痕が残る。澄はそれを凪に手渡し、笑みを浮かべた。「あの子は、書き残すことで自分を外へ出していたの。あなたが見つけてくれて、羽美ちゃんも喜んでいるよ」
凪はその言葉を胸に受け取り、羽美の存在がより確かなものになったのを感じた。伝える決断は、凪が思っていたほど重くはなかった。言葉は、伝えることで新しい場所に根を張るのだと、凪は学んだ。

眠る前、凪はナミマガシワの手紙を読み返した。第四通に書かれていた「心は外へ行きたがるのに、からだは言うことを聞きません」という一節が胸に刺さる。彼女の言葉は悲しみだけではなく、深い受容と、静かな願いで満ちていた。最期の六通目は、存在していないかもしれないし、まだ見つかっていないだけかもしれない。だがその輪郭は、ここに在る。

凪は翌朝、いつもの浜へ向かった。波は昨日と同じように寄せては返していた。砂の上に点々と並ぶ貝殻の中で、ふと一つが光った。手に取ると、貝殻の内側に、最後の言葉があった。
『澄ちゃん、もしこれが誰かの手に渡るなら、どうか笑ってください。
わたしはもう、風の音と貝の光で満ちています。
今までありがとう。誰かの記憶になれたなら、それだけで嬉しい。』
言葉は貝殻の曲面に沿って静かに震え、凪の掌で温度を持った。海は何も言わず、ただその背後で呼吸を続けている。凪は深く息を吸い、言葉を胸にしまった。
澄の過去は、単なる出来事の集積ではなかった。羽美の生きた証が文字になり、貝殻に残り、凪という新しい手に渡ったことで、時間の輪は静かに閉じた。真実の輪郭ははっきりしてきたが、輪郭の内側にある温度の方が、ずっと大事なのだと、凪は分かっていた。

冬の初め、海はさらりと冷たくなり、砂の色も落ち着きを増した。凪はある朝、祖母と一緒

に貝を拾う代わりに、自分の言葉を刻むことを決めていた。倉庫で澄が大切にしていた黄色のペンにインクを足して、小さなナミマガシワを手に取る。手のひらに乗るその薄さに、凪は息を呑んだ。
「ありがとう」と、凪は貝の内側に書いた。黄色の線は貝の虹色に溶け、光に透かすとまるで波紋のように広がった。文字は羽美が残したものとは違う節回しで、けれど同じ海に向けられた祈りのように見えた。澄は隣で微笑み、そっと凪の肩に手を置いた。
凪は貝殻を箱にしまい、海へ向かった。波はいつもと変わらずに寄せては返し、遠くの水平線は淡い灰色を帯びている。凪は膝をつき、息を整え、貝を潮に向かってそっと押し出した。貝は軽く揺れ、やがて波に吸い込まれて見えなくなる。凪の胸には、ぽかりとした空白ができたが、それはやわらかな何かで満たされていた。

その夜、窓辺で凪は小さなノートを開いた。羽美が残した言葉を自分なりに写し取り、澄の声で聞いた昔話をメモする。言葉は紙に落ちるたびに、形を変えて増えていった。凪は知っていた。貝殻に刻まれた言葉が海を、時を渡るように、自分の言葉もいつか、どこかの誰かの手に触れていくだろうと。
月明かりが海を薄く染め、窓の外で波が静かに拍子を刻む。凪はノートの最後の行に小さな丸をつけ、自分の貝殻を一つ箱にしまった。羽美の声はもう過去ではなく、二人の生活の一部として息づいている。言葉は継承された。見えない糸が、三人を優しくつないでいた。

物語は大きな劇的な変化を経ずに、静かに終わる。だが終わり方は優しく、確かだ。言葉は消えず、光に透かすたびに誰かの心を照らす。凪はそれを知り、また次の朝も浜辺を歩くだろう。貝はいつか別の誰かの手に渡り、また新しい言葉を運ぶだろう。潮騒は繰り返す。